

第8回むつ市総合教育会議議事録

開催日時： 平成30年3月18日（14：00～15：30）

開催場所： むつ市中央公民館 講堂

出席者： 宮 下 宗一郎 市長
宮 浦 雅 子 委員長
納 谷 順 子 委員
村 中 一 文 委員
田 中 志 昌 委員
遠 島 進 教育長

オブザーバー： 文部科学省 初等中等教育局 初等中等教育企画課
教育制度改革室 室長補佐 大 類 由紀子 氏

事務局	教育委員会	金 澤	教育部長
		須 藤	政策推進監（総務課長）
		和 田	副理事（学校教育課長）
		畑 中	総務課総括主幹
		吉 田	生涯学習課長
		中 居	学校教育課総括主幹
		木 村	中央公民館長
		石 澤	川内公民館長
		佐 藤	大畑公民館長
		三 上	脇野沢公民館長
		柳 田	図書館長
		福 山	総務課主幹
		柏 谷	総務課主幹
		加 藤	生涯学習課主幹
		石 川	学校教育課指導主事
		市長部局	中 里
坂 野	民生部政策推進監（市民課長）		
伊 藤	民生部市民スポーツ課長		

1. 開会

事務局： 御来場の皆様、本日は、年度末のお忙しい中にもかかわらず、沢山の御来場をいただき、誠にありがとうございます。

それでは、只今より「第8回むつ市総合教育会議」を開催いたします。

はじめに、私から、本日の総合教育会議について、簡単に御説明させていただきます。

本会議は、「地方教育行政の組織及び運営に関する法律」により定められた会議で、「教育、学術及び文化の振興に関する総合的な施策の大綱の策定」、「教育に関する重点的に講ずべき施策」、そして「児童、生徒等の生命又は身体に被害が生ずる場合等の緊急の場合に講ずべき施策」について、市長と教育委員会とが協議を行うことを目的としております。

また、会議は公開で行うとされておりますことから、本日は、このようなフォーラムスタイルで開催する運びとなりました。

短い時間ではありますが、お付き合いいただきますようお願い申し上げます。

2. 主催者挨拶

事務局： それでは、次第に従い進行させていただきます。

はじめに、主催者であります、むつ市長 宮下 宗一郎より御挨拶をさせていただきます。

宮下市長： 皆さん、こんにちは。第8回ということで、総合教育会議がこのような形で、公開で開催させていただくことになりました。

実は、毎回、公開で開催させていただいているのですが、皆さん議事録では読んでいただいていると思いますが、なかなか校長先生方、あるいはPTAの皆さんに来ていただく機会も少なく、

大畑で開催した際は、かなり来ていただきましたが、そういうことで、今回、文部科学省から大類室長補佐をお招きして、このような形で開催することになりました。

今回の第8回目の会議は、特別な意味として3つございます。

まず1つは、総合教育会議が始まって教育大綱を作ってから、様々な取組を教育委員会、そして学校の現場でやらせていただきました。その成果の報告が今日行われるということですので、これまでの取組と来年度以降の展望を、今日お集まりの皆様と、是非とも共有させていただきたいということがございます。

それからもう1つは、遠島教育長には8年間にわたって教育行政を牽引していただきました。今日の会議で、公務ということでは区切りということですので、その勇退の記念ということでこのような形で開催をさせていただきたいという風に考えております。

また、3つ目といたしましては、大類室長補佐に来ていただいております。初等中等教育局初等中等教育企画課 教育制度改革室というところで業務をされているのですが、実は私達、大学の同窓生というか、1つ上の先輩でありまして、当時、国家公務員試験を受けた年が一緒で、同じ平成15年に彼女は文部科学省、私は国土交通省ということで、それぞれ違う省庁であります。同じ試験を受けて入って、同じ大学ということで当時から親しくさせていただいております。実は、昨年12月ですか、むつ市から1人、文科省にこれから研修生を出すということで、文科省ではどういう仕事をするんでしょうかということをお伺いに行った際に、できればむつ市で講演をして欲しいと思いむつ市の教育の諸課題について申し上げたところ、喜んでいきますということで、本日、来ていただきました。

今、話にあったように、実は来年度、市役所から文部科学省の初等中等教育局の方に研修員ということで、1人職員を派遣することになりました。今日が、文部科学省との連携という意味で、

きっかけとなるすばらしい1日になるのではないかなと、私自身は期待しているところであります。

いずれにいたしましても、我々、教育大綱、そして総合教育会議を始めてまだ2年と少しであり、市長が、この教育委員会に参画するという仕組みも始まったばかりであります。

私が実感するのは、私からみると、なかなか現場が遠いんじゃないかなと感じておりますけども、今日をきっかけに、現場、教育委員会、そして市長部局が一体となって、むつ市のタカラである子供達の未来を拓く、そんな1日にしていきたい。心からそう考えておりますので、どうぞ皆さん最後までお付き合いいただきたいと思います。

冒頭の私の挨拶は以上とさせていただきます。

本日は、よろしく願いいたします。ありがとうございました。

事務局： ありがとうございました。

2. 基調講演

事務局： それでは、基調講演に移らせていただきます。

本日、講師を務めていただきますのは、文部科学省 初等中等教育局 初等中等教育企画課教育制度改革室 室長補佐 大類 由紀子 様でございます。

本日は、大変お忙しい中にもかかわらずお時間を作っていただき、「義務教育改革の動向」というテーマで、御講演をいただけることとなりました。

それでは、大類様、どうぞよろしく願いいたします。

講師（大類室長補佐）： みなさんこんにちは。

今日は本当に日曜日というのに、3月年度末でお忙しい中来ていただいて、本当にありがとうございます。しかも文部科学省、色々と本当にお騒がせしていて、どんな人なのかなんて興味津々で

来られた方もいらっしゃるかもしれませんが、普通の人間です。普通のどこにでもいるような公務員の一人なんですけども、今、宮下市長から御紹介いただいたように、東北の中で、大学まで過ごしていました。出身は福島です。色々、東日本大震災以降、本当に多くの県に御支援や御協力をいただいて、何とか何とか復興しつつある福島であります。事故の影響により放射線の線量が高くてまだまだ帰れない町もいくつかあるんですけども、この4月に、7年ぶりに学校が地元で再開するという地域が5箇所あります。本当に福島中心で、私実はこの場所でも復興支援、学校再開の支援をやっているんですけども、感慨深い春を迎えられるというようなことです。

まだまだ福島大変ではあります、私の中では東北のお仕事に関われることはすごくうれしくて、震災以降、宮城県の石巻市大川小学校、聞けばみなさんピンとこられるかと思うんですが、津波で74名の児童と10名の先生が亡くなられたところ。もしかしてその校舎を見に行かれた方もいらっしゃるかもしれません。その、事故検証の仕事も携わりました。74名の命だけでなく、その家族の思い、また先生方の御遺族の思いというのを受け止めて、一体何故事故が起きてしまったんだろうか。どういう思いで保護者が学校に子供達を送りだしていたのか。そして、帰ってこないというこの現実をどう受け止めておられるのか。これから人生を生きていくために、どういう風に御支援申し上げたらいいのか。そして、残念ながらこの悲劇からどんな教訓を生み出して、全国に伝えていったらいいのか。私の仕事の中では非常に辛い仕事だったんですけども、真っ正面から取り組まなければいけない仕事で、宮城、福島の仕事をしていると、本当に東北の皆さんのことを広く考えながら、イメージしながら仕事をすることが楽しくもあり、自分にはぴったりにくるなと思うところですけども、今回、青森県にも関われることを嬉しく思っているところです。

次のページに私が関わった仕事を書かせていただいているんですけども、今は、一番最後の行に

ありますように、初等中等教育企画課の教育制度改革室というところにおります。やっている仕事は、夜間中学の設置・充実です。東北には1校もないですけども、今は不登校、小学校、中学校をずっと不登校で通えなかった。形的には卒業して成人になっているけども、やっぱりあの頃の中学校の学びってどうしても働くにも社会に係わるにも必要で、だからもう一回学び直したい、そういう方が全国にたくさんいます。そういう方々の場所として夜間中学の設置・充実に取り組んでいたりします。

そして、むつ市さんが一生懸命やっている小中一貫教育の推進もやっています。

こんな仕事をしていますが、義務教育の根幹に係わる事務が非常に多くてですね、なぜ、この学校制度が戦後こんな風に成り立ったのかとかですね、これからどうなっていくのか、過去と未来を結んでいく仕事をして、今、何をしたらいいのか、そういうことを考えながら仕事をしています。

その時、大事になってくるのが、さっき申し上げた福島の学校や市町村と直接行ったやり取りであったり、福島で直に聞いた保護者の意見であったり、そういったことを大切にしながら、経験を大切にしながら仕事をしている状況です。

今日は、演題としては「義務教育改革の動向」という風に銘打っている訳ですけども、話をすることは四方山話というか、私が最近感じていること、また、これから皆さんに伝えていきたいことを縷々、30分でお話させていただきたいと思えます。

そういったことで、2ページ目ですね、これは、皆さん教育関係者はご存じのPISA、OECDがやっている学力検査の結果です。世界に比べて日本の子供達がどういうポジションにいるかをグラフに示して、2000年から2015年にかけて日本の子供達の学力は非常に高いですよということを示すデータになります。大きく分けて、読解力、数学的リテラシー、数学的な思考力・判断力・表現力、こういった所の力の推移、また科学的リテラシー、科学的に考える思考力・判断力・

表現力、こういったものの現状を示したものです。一番右端の枠の中にありますように、世界ではやはりトップレベル、学力のところは事実です。ただし、残念ながら、日本の経済界というか、リードしている人達からいうと全く逆でして、何で日本は世界の中でこんなに学力が高いのに世界では活躍できない、仕事、ビジネスの中では全然日本人の力が発揮できていないといわれます。これは、学力検査の結果だけでは、図れない何かがあるのではないかと、という風によく指摘されます。もっと違う教育が求められているのではないかと、こんな調査結果で慢心してはいけません、と文科省の人間はよくいわれているのが現状です。

では、もっと意識的なところで何が違うんだらうかということ进行分析していきますと、数学と理科について子供達に質問しました。「勉強は楽しいですか」と質問をした時に、日本の子供達は52%。結構高いなと私は思っていますけども、数学の勉強が楽しいが52%。でも国際的、海外の平均を取ると71%で20%の開きがあります。楽しいと思っているんですね、日本の子供達よりも。理科も同じように20%近くの開きがありますけれども、「理科が楽しいと思えますか」という質問に対して、日本人は66%。国際平均は81%。残念ながら理科の授業は楽しいと思えない訳です。

また、2つ目の質問となりますが、「数学や理科の勉強をすると日常生活に役立つと思えますか」。で、日本、結構高いなと思ったんですが、74%ですけども、国際的な平均はもっと高く、あいかわらず10%開きがあります。理科についても、「理科が日常生活に役立つ」という回答は、日本では62%。国際的にはプラス20%以上の85%が回答しているという風に、やはり学校現場が、ちょっと社会と乖離してしまっている所ではないかなというのが、こういうデータからでもみて取れるところであります。

もうちょっと見ていきたいのですが、世界のGDPに占める日本の割合。経済力を示すようなデータですが、今現在、過去はアメリカに次

いで2位と言われていたが中国に抜かれ、更に今後はインドにも抜かれるのではないかとということもあります。

一方、「人口の推移と将来人口」を見ていくと、どんどんどんどん減少していく。50年後には総人口の約3割が減少していくという推計がなされています。もちろんこれは全国の数ですので、青森とか、むつ市とかはまた違う数値かもしれません。

また、生産年齢の人口。これは、15歳以上64歳未満の人口がどう変わっていくかということを示す折れ線グラフですが、2060年には、2010年に比べ約半数に減少してしまう。そういうことが計られています。これは取りも直さず、一人一人の生産性を今の倍にしていけないと今の経済力は維持できないということが経済界からいわれているところであります。

最後のグラフは、一人あたりのGDPですけれども、日本は、アメリカの半分程度という状況になっています。

私は、経済と教育の話をリンクして話すのは余り好きではないので、こういう危機感を煽るようなことはしたくないのですが、ただ、教育界とは別の世界で起きている日本の立ち位置というのは、しっかり直視していかなければいけないかなと思っているところです。

また、今度は、将来予測について著名な学者さんが何を言っているのかを少し御紹介させていただいておりますが、「今後10年から20年でアメリカの総雇用者の約47%の仕事が自動化されるリスクが高い」。タクシー運転手さんとか、バスの運転手さんとか、完全に自動車が自動化されて仕事がなくなるのではないかと予想されています。

また、「2011年度にアメリカの小学校に入学した子供達の半数以上は、今は存在しない職業につくだろう」。これは皆さんもよくご存じのお話ですけども、今ない仕事にこれからの子供達は就くことになるだろうという予測です。

また、3つめの予測ですが、今、10歳の子供

達は、いずれ平均寿命は107歳になるという風にいわれています。人生100歳ではなく、今の子供達は110年、120年生きるという風にいわれているところです。そういう予測の元に、「そういう子供達は、人生の早い時期に一度まとめて知識を身につける時代は終わりだ。テクノロジーがどんどんどんどん進歩していく中では、キャリアの初期に身に受けた専門技能を頼りに長い人生を生き抜くとは考えにくい」。要は学校を卒業しても、生涯学習ですね。30歳になっても40歳になっても、50歳になっても学び続けなければならない。どんな年齢であっても学びをしっかりとしていかなければならない。そういう予測がされています。

これは本当に当たってくるだろうなとは思ってしまして、10年前には私はガラケーで一生懸命メールの文字を打って苦勞したとかそういう時があったのですが、今は、スマホでどんどんやり取りしなきゃいけない。また、SNSをやらなきゃいけないという風になっていて、5年後に、私のツール媒体がどうなっているかなんて、なかなか予想できないんですけども、今の子供達は、自分が30歳40歳で社会の中核になっている時代というのはどうなっているのか予想はしきれないのかなと思います。

もう、ご存じのとおりですけども、新しい学習指導要領では、こういった急激な社会の変化、予測を超えて変化をしていくというけれども、その中でも、ちゃんと自分を有して、自分らしく生きていくために必要な資質、能力というものを提示して、それにあった学習計画というものを編成していこうという風になっているところでもあります。

人工知能がいかに進化しようとも、与えられた目的の中での処理である。一方で、人間は感性を豊かに働かせながら、目的を自ら考え出すことができる。自らの目的を設定し、目的に応じて必要な情報を見出し、自分の考えをまとめたり、相手に相応しい表現を工夫したり、他者と協働しながら納得策を見出したりするし、強みを持って行か

なければならない、という風に指導要領のベースとなる考え方には明記されております。

また、必要な力を成長の中で育てているのが人間の学習である。予測できない変化に受け身で対処するのではなく、主体的に向きあって関わり合い、その過程を通して自らの可能性を発揮し、よりよい社会と幸福な人生の創り手となっていけるようにすることが重要である。

また、質的な豊かさが成長を支える成熟社会に移行していく中で、様々な情報や出来事を受け止め、主体的に判断し、自分を社会の中でどのように位置づけ、社会をどう描くかを考え、他者と一緒に生き、課題を解決していくための力の育成が社会的な要請となっている、という風になっています。

こういった社会的要請を受けて、生きる力を育成することが学校教育の目標でもありますし、実際にも実践していただいている、ということですね。

改めて、新しい学習指導要領の内容としては、2030年とその先の社会の在り方を見据えながら、学校教育を通じて子供達を育てたい姿、これをしっかり描かなければならない。

それは、主体的に学びに向い、必要な情報を判断し、自ら知識を深めて個性や能力を伸ばし、人生を切り拓いていくことができること。また、対話や議論を通じて、多様な人々と協働したりしていくことができること。

そして、試行錯誤しながら問題を発見・解決し、新たな価値を創造していくとともに、新たな問題の発見・解決に繋げていくことができること、という風にしております。

ちょっと長くなってしまいましたけど、図示化するとこんな形で、このトライアングルを回していきましょうというのが、再三ご存じのことですが、文科省が指示してきたこれから育成すべき資質・能力の考え方であります。学びに向かう力や人間性の他に、知識・技能、思考力・判断力・表現力となっていますが、これまでは、どちらかという左下の知識・技能について、何を理解して

いるか、何ができるか、ここにフォーカスしたような取組ばかりがなされてきたのではないかと。特に全国学力学習状況調査が導入されて以降、知識・技能ばかり、B問題という所までいくと思考・判断・表現、この下の二つばかり注目されてきたのかもしれませんが、実はそのベースとなる一番上の学びに向かう力、「どのように社会・世界と関わり、よりよい人生を送れるか」という、本当に人間の姿勢というか基本的な考え方ということが凄く大事になってきているというのが今回の指導要領では強く打ち出しているのかなという風に私は捉えています。

この3つのトライアングルを実現していくために、また新しいトライアングルになってしまいますが、それでは、学校現場や教育関係者は何をしたらいいのかという風にやっていけばいいのかということを考えるための構図です。

上のトライアングルの話をしていきますけども、「子供達にとって、何ができるようになるのか。」という大きな目標をまず設定しましょう。よりよい学校教育を通じてどんな未来の創り手として育てていくか、ここをまず設定することが大事です。その設定した後に、実際、何を通じてどのように学ぶか。下の二つの部分。ここをしっかりと分析することが非常に重要になってきます。これは、まさにカリキュラム・マネジメントの考え方として、それぞれの関連がどうか、教科・科目等の目標・内容をどのように捉えてどのような手段で実現していくか、どのような授業をしていくかということが、実際はすごく大事になってくるということになります。

ちょっと話が変わってしまいますが、データの話になります。教育効果の高い学校でどんな取組が行われているかをまとめたものです。

一番上、例えば、「児童が自分で調べたことや考えたことをわかりやすく文章に書かせる指導」を「よく行った」という学校は、やはり学力テストの結果も非常に高かった、ということが相関で見受けられました。

2番目ですが、「授業最後に学習したことを振

り返る活動を計画的に取り入れた」を「よく行った」という学校は、テストの結果も非常に高かった。逆に「あまり行っていない」という学校では、低かったという風に分析、クロス集計したところ結果が出ましたので、やはり効果が高いということがわかりました。

家庭学習について「算数の指導として、家庭学習の課題の与え方について、教職員で共通理解を図った」。ただ何ページから何ページまでやってきてね。というのではなくて、それぞれの教職員が、なぜこの部分をこの日に出すか。もちろん宿題を出すことができないから予習をさせるとかですね、優先順位を付けさせて一緒に宿題を出させたりする。ということを実行的に行ったという学校は、やはり学力調査の結果も高かったということがわかりました。

次のスライドでは、今度は学校の中のことでですね。子供とのことではなくて、学校の中でどのような対応をしてきたかというところです。

例えば、全国学力調査の結果を学校全体でPDCAを回すために活用したかと聞きましたところ、「よく行った」と回答した学校というのはやはり学力が高かった。「あまり行っていない」というところは低いというようなことになっています。

また、少人数・TT・補習学習といったことも、計画的に取り組んでいるかどうか。例えば、1学級を2つ以上の学習集団に分けて行ったというところは、学力調査の結果も高かった。いろんな工夫がそれぞれあるんですけども、主体的、意図的に、計画的に学習集団を形成したという場合は教育効果が高いということがわかりました。

また、学校外ソースの活用のところですけども、「地域の人材を外部講師として招聘して授業を行ったから」という質問に対しては、「よく行った」という学校は、やはりテストの結果が高いということがわかりました。

最後に、教員に対する研修の実施状況ですね、講習参加を学校の組織として促したり、しっかり参加させたりするようなどころは、教育効果が高いということで、教員1人1人任せにしないとい

うことですね。校長先生が全体を見渡しながらかP D C Aをしっかりと回そうとか、どのような習熟度学習をするとか、地域の人材、地域の力をどのようにお借りしようとか、そういうことを組織全体で、学校全体で共有し、取り組むという学校は明らかに学力の向上に繋がっているというのが現状なのかなと思います。

そして、むつ市教育プランを拝見させていただきました。推進目標をしっかりと掲げ、それに応じた目指す学校像をしっかりと定義して、さらにそれを移して目指す子供像というものをちゃんと掲げているのを拝見して、すばらしいなと思ったところではありますけれども、すごくいっぱい先生は大変だなと若干思ってしまったところです。ですけれども、30年度始まりますけれども、先程申し上げたカリキュラム・マネジメントの達成というのを、しっかりと日々の活動、これは年間で取り組むということが大事になってきますけれども、日々、週、一ヶ月、一学期、そういう単位毎でもマネジメントの考えをどんどん取り入れながら実践していただくことが大事だなという風に思っております。

カリキュラム・マネジメントの3つの側面という所ですけども、カリマネ、カリマネとだんだん共通語になってきつつありますけど、改めてどういう視点で取り組むかという所です。

1点目、一番大事なところですが、「各教科等の教育内容を相互の関係で捉え、学校の教育目標を踏まえた教科横断的な視点で、その目標の達成に必要な教育の内容を組織的に配列していく。」ちょっと解りにくいかもしれませんが、それぞれの教科、相互の関係なんかをしっかりと指導要領、あるいは解説の中で読み込んでいただいて、目指したい学校、むつ市でいえば「目的をもって主体的に学ぶ子供」、これを育成するために、理科ではどういいう話合い活動をするのかなとか、算数ではどういいう学習をするのかな、どういった生涯学習をさせるのかな、こういったことを、それぞれの内容、目標をもってしっかりと位置付けて実践して教育活動を形成していくことが非常に重

要になってくると思います。

それに必要な授業時間数をどう割り当てるか、また小中一貫教育に関しては、小学校、中学校の接続、指導をどう繋げていくかという視点が非常に重要です。

改めて、目指す教育内容、その目的というのを捉え直していただくことが必要になると思います。もちろん、これまで先生方、無意識的にも意識的にもやってこられたことだとは思いますが、改めてまわりを見回して、1つ上の学年、あるいは1つ下の学年がどうやっているのかな、他の教科がどうやっているのかなというのを、まわりを意識しながら意図的にやっていくということがすごく大事ななと思っています。

また、2番目ですね。「教育内容の質の向上に向けて、子供達の姿や地域の現状等に関する調査や各種データ等に基づき、教育課程を編成し、実施し、評価して改善を図る一連のPDCAサイクルを確立する。」ということです。先程、むつ市の教育目標がありました、必ずしも、学力調査のA問題、B問題の結果だけでは当然ない訳ですよ。ただただ、この数値をあげればいいなんて、そうではないはず。例えば、形成的調査の中でもですね、「地域や社会をより良くするために何をすべきか考えることがありますか」という設問があります。あるいは、「先生から示された課題、自分たちで立てた課題に対して、自ら考え、自分から取り組んでいたと思いますか」、こういった授業に対する姿勢を聞く設問なんかもあります。こういう数値の向上をしっかりと掲げることは非常に重要だと思います。

どうしても、メディアの報道によって、テストの結果の部分だけが注目されがちですが、実は、こういう姿勢的な部分、形成的な部分の向上を目指すということの方が、これからの30年、40年、社会が疲弊していくような中で生きていく子供達にとってはすごく大事なんではないかなという風に思っております。

ですので、PDCAサイクルを回すときも、ゴール、目的をどうするのかというのは、是非是非、

学校内でよく議論して頂きたいなと思っております。

最後に、カリマネの3つ目の側面ですが、「教育内容と、教育活動に必要な人的・物的資源等を、地域等の外部の資源も含めて活用しながら効果的に組み合わせていく」ということを示させていただきました。今日、小中一貫校、施設一体型の学校を見させていただきましたが、ここだったら、小学校の先生が、5時間目が終わったら6時間目、中学校でTTの授業に入ることができるんだろうとかいろいろ思っていたんですけども、その地域にある環境、ツール、どういう範囲、どういうものがあるかを改めて捉え直していったら、先生方もより効果的に授業の時間割りを配置していくとか、また地域の講師をどのように増やすとか、地域の伝統行事をどういう風に関わらせていくことができるのか、というようなことをよくよく考えていくことが非常に重要です。

目的、PDCAを回していくための手段ということが非常に大事になってきますので、いかに力を借りて、そして、学校の中でどういう人たちを有効に機能させながら、年間の目標を実現していくかということをよく考えていただきたいと思います。

だいたい、カリキュラム・マネジメントの話を見せていただきましたが、小中一貫教育の部分をちょっとお話させていただきましたけれども、ここは、高知市立義務教育学校を素にしている部分です。この事例集、小中一貫教育の中で気をつけていただきたいのが、小中一貫教育をやるのが目的化しつつあるのが本当に問題だなと思っておりまして、いろんな学校を視察させていただくんですけど、一貫して何をしたいのですかというのが見えないんですね。一貫にするといろんな成果は出ます。学びの姿勢が身について、あるいは中1ギャップが解消された、不登校が減少した、などいろいろありますけれども、では、「じゃあ何のためにやってきたんですか」ということへの答えがたまに返ってこない。教育委員会が取り組んだからという答えになってしまうんですが、改めて、

先程カリキュラム・マネジメントの話をしましたけれども、この子供達にどうなって欲しいのかな、そのためにどういう手段を用いるのかな、その手段としての小中一貫なのかな、ということ、目的と手段を間違えないようにしていただきたいなと。そうでないと本当に先生方が疲れ切って、課題に書いてありますように、教職員の多忙感が増えてしまったり、打合せの時間が確保しきれなかったり、そんな課題も出てきますので、いろんな取組を示されることがありますが、目指す子供像、そのための目指す学校像、そして何をするのかというものを手段としてしっかり整理しながら、位置付けしながら、取り組んでいただくことが非常に重要だという風に思っております。

ある程度時間が来てしまっ、お話ししたいことなかなか言えませんでした、今、文部科学省、働き方改革に一生懸命取り組ませていただいております。文章を読んでもあまり効果的じゃないなんて思う方も多いかもかもしれませんが、働き方改革、やっぱり一番の原因はどこに問題があるのか、この真っ黒なところに、何が課題で先生方が疲弊しているのかというのを一番わかっている学校なり教育委員会が、一緒に働き方改革、大事なものにかかる時間、子供に関わる時間というのを増やすために、何を優先的に行っていかなければいけないのか、よく話をしていただきたいなと思っております。

これから激動の時代、指導要領の全面改定が平成32年度になりますので、全実施に向けた準備にかかる時間、教育課程の編成とかで大変お忙しくなってくるかと思いますが、繰り返しになりますが、目的と手段を誤らずに、できることから一歩一歩進んでいくということによろしいのかと思います。

地域の力を借りながら、保護者とも話し合いをしながら、むつ市らしい教育をしていただきたいと思っております。

今日は、総合教育会議で大事な機会に御招待いただきありがとうございますのですが、さっき、宮下市長から御紹介いただいたように、古い付き合い

の宮下くんという関係ですけども、彼、本当は文部科学省を目指していたんですね。国土交通省というところに入っていましたけども、教育はすごく大事で、自分は教育をやりたい、どっちもやりたいんだと悩んでいる話をしたことを覚えています。

私が国家公務員になって、なかなか現場の息吹を聞けないし、手応えがなくて仕事がつまらないと悩みを吐露したときに、何言っているんですが大類さん、それはあなたの想像力がないからですよ、もっと学校のことを、想像力を働かせて自分のやりたいこととの繋がりをみつけなさいよと叱られたことがあったのですが、彼は、いい眼を持っているなとすごく思っていて、その彼が市の教育を変えたい、むつ市を大事にしていきたい、子供達が地域から出て行ってしまっても、それでもその子供達がむつ市発としていいものとなるように、力を尽くしていきたいと力説したのを聞いて、今日は、彼が大事にしている教育関係者の方とお話しできたことを嬉しく思います。

ちょっと脈絡のない説明になってしまったかもしれませんが、この後のディスカッションの方でも、参画させていただきたいと思っております。

今日は、どうもありがとうございました。

事務局： 大類様、ありがとうございました。

これもちまして基調講演を終了させていただきます。

本日、大類様には、大変お忙しい中、当市へお越しいただきました。皆様、もう一度盛大な拍手をお願いできますでしょうか。

事務局： それでは、ここからはパネルディスカッションに入らせていただきます。

大類様には、引き続き、アドバイザーとして会議にご参加いただきたいと存じます。どうぞ、よろしくお願ひいたします。

事務局： それでは、会議に移らせていただきます。会議につきましては、むつ市総合教育

会議設置要綱第4条第3項の規定により、市長に議長を務めていただきます。

市長、よろしくお願ひいたします。

宮下市長： 会場の皆様、本日はお忙しい中、お集まりいただきまして、誠にありがとうございます。

それでは、ここからパネルディスカッションに移らせていただきます。

大類様には、アドバイザーとして、委員の皆様からいただいた意見について、お話しいただければなと思っております。

宮下市長： それでは、本日は、『平成29年度「むつ市教育大綱」における主な施策の結果報告について』ということで、議題とさせていただきます。

資料について、事務局からの説明をお願いします。

政策推進監： それでは、お手元の資料、「むつ市教育大綱における主な施策の結果報告」を御覧願ひします。

本日は、3月1日時点における教育大綱の中にあります4つの重点目標の、学力の向上、体育・健康教育の充実、夢を育む教育、地域と共にある学校、この施策の取り組み状況についてのご説明となりますが、時間の都合上、10月に中間報告をいたしました施策を中心とした説明となりますことを御了承願ひします。

本日説明する施策は、1ページの青森県学習状況調査、2ページの新聞を活用した教育活動、5ページから6ページにかけての小学校部活動のスポーツ少年団への移行、そして、最後になりますけれども、12ページから13ページにかけての、ジオパークに関する教育活動の4施策となります。

それでは、4施策について、それぞれ担当より御説明いたしますのでよろしくお願ひいたします。

学校教育課： むつ市教育委員会学校教育課 山

田と申します。よろしくお願ひいたします。

私からは学力の向上の取組について御説明させていただきます。

まず、教育委員会では、学力向上のアクションプランとして数値目標を設定しております。県平均・全国平均を3ポイント上回るというのですが、およそ3ポイント上回ると、全国でもトップクラスの成績となることから、このように設定させていただいております。

では、学習状況調査の状況について、簡単に触れてみたいと思います。

はじめに、4月に実施された、全国学力・学習状況調査の結果です。小学校6年生と中学校3年生が対象でした。

まず、小学校6年生ですが、国語、算数ともA問題、基礎基本の内容は概ね良い内容でありましたが、活用等B問題については、国語、算数とも県を下回りました。

次に中学校3年生です。国語A、数学Aについては概ね良く、数学Bだけが全国、県を下回りました。

続いて、8月に行われた県の学習状況調査の結果です。対象は、小学校5年生と中学校2年生です。

始めに小学校5年生です。教科全体ですと0.6ポイント県を下回りました。中学校2年生は、強化全体として1ポイント県を上回りました。

これらの調査結果から課題として考えられるのは、思考力・判断力・表現力の更なる育成が大切なのではないかとことです。

結果からは、基本的な知識・技能はしっかりと身につけているということがわかりました。そこで、これからは、その身についた知識や技能を基に、思考力・判断力・表現力の育成が大切なのではと考えます。

よって、基礎・基本をまずはしっかりと定着させた上で次のステップへという一方向の指導というよりは、思考力・判断力・表現力の育成からスタートし、必要に応じて基礎・基本に戻るといった授業スタイルを含めたスパイラルによる指導を更

に充実させていく必要があるのかではないかということ。また、これからも、個に応じた指導や将来に向かう主体的な学習態度の育成も一層充実させていくことが大切ではないかと捉えました。

そこで、課題解決に向けた今後の方向性を、むつ市小・中学生学力向上の構造図としてまとめてみました。

これは、新しい取組を導入したというよりは、これまでの各校でのきめ細かなと取組とその成果を整理して、新学習指導要領を加味した資料と捉えていただきたいと思います。

図の中段にある「2 学力向上の重点」の6つの要旨により、今後も、知・徳・体のバランスの良い成長を促してまいりたいと考えております。

では、6つある学力向上の重点を簡単に確認していきたいと思えます。1つ目は、小中一貫教育の推進です。

2つ目は教育課程の編成について。

そして、「主体的・対話的で深い学び」を視点とした授業改善。ここが、直接、児童生徒の授業に関わってきますので、最も中心となる取組であると考えます。もちろん、これまで意識して取り組んでいただいている視点ではありますが、一層充実させていきたいということ。そして、そのためには、他の関連した様々な取組の充実も必要となってくると考えます。

4つ目、基礎的・基本的な知識・技能の定着。一人一人を伸ばす指導。そしてキャリア教育の推進です。なお、むつ市教育委員会では、次年度から新規事業として、キャリア教育推進事業を実施することとなりました。これは、全国的な活躍をされているむつ市出身者や県内出身者を講師に迎え、授業等で講演をしていただくことで、より広い視野で生き方を考えたり、夢や希望を育む機会を提供するといったものです。教育委員会で講師を絞り、各学校の希望に応じて実施することとなります。詳しくは、合同会議にてご説明させていただきます。

以上、学力調査の結果から見えてきた課題解決に向けて、今後の取組を整理させていただきます

た。これからもむつ市全体として、同じ方向を向き、知・徳・体のバランスの取れた児童生徒の成長に向け歩んでいければと考えておりますので、よろしく願いいたします。

学力向上の取組については、以上です。

学校教育課： 学校教育課の石川です。私から、主体的な学習の推進に向けた「新聞を活用した学習への支援事業」について御説明させていただきます。

本事業の目的は、子供達が新聞に親しみ、新聞を読む習慣を身につけ、授業等で新聞を活用する素地を育むことです。そのため、小学校5年生以上及び中学校全学年の各学級に1部ずつ、小学校は55学級、中学校は69学級、合計124学級に新聞を購読しております。また、教員向け研修会を実施し、それに基づき、各校で工夫して取り組んでいただいております。

新聞を活用する主な利点としましては、一覧性、詳細性、解説性、記録性等が挙げられ、思考力・判断力・表現力の育成が期待されております。

それでは、各校の主な取組を写真で紹介したいと思います。まずは、朝の会でのニュース発表、毎日のニュースを教室や廊下に掲示する、広告の農産物の産地を調べ、日本地図に貼り付ける、グループで班新聞を協力しながら作成する、むつ下北の郷土の記事をまとめて一覧にする、ノートに記事を貼り、自分の考えを記入する、上級生が下級生に新聞記事を解説する、修学旅行の事前学習で活用する、進路情報の提供に活用する、教員から子供達に、読んで欲しい本を紹介する。

また、今年度は、15校で新聞記者による出前授業を実施しております。各種コンクールにも応募しております。毎日配達される新聞は、このようにして、各学校の廊下に掲示、保管しています。

続きまして、今年度1月に実施した子供と教員のアンケート結果です。4月に比べ、毎日、新聞を読む小学生が倍増しております。

子供達が印象に残った活動では、朝の会のニュースの発表、個人新聞の作成、記事の切り抜きな

が多いようです。

今後の成果としましては、「ニュースや時事に関心を持つ子供が増え、語彙が増加したと子供自身が認識している」「家族や友人と新聞についての会話をするようになり、教員から、コミュニケーション力の向上が期待できる」「読解力、情報活用能力、メディアリテラシー、社会参画等の育成に効果が期待できる」等が挙げられております。

今後の方向性として、新聞を読む時間の確保、各校での一層の取組の推進、教材や教具の整備が大切だと考えております。

最後になりますが、この写真のように、子供達が生き生きと主体的な学習を推進できるよう、今後とも、学校の協力を得ながら本事業を推進して参りたいと考えております。

以上で、新聞を活用した学習への支援事業についての報告を終わります。

学校教育課： 学校教育課の中居と申します。

教育大綱には、「スポーツ少年団への移行や、指導者バンクの創設など、地域の実情を踏まえた上で検討を進めること」が記されています。

その背景の一つが、急激に進んだむつ市内の児童・生徒数の減少です。平成18年からの10年間で、約1,500人が減少しており、この傾向は、この後も続く方向であります。

また、市内の小学校教員数を年齢別にみますと、高齢化が進んでおり平均年齢が50歳。体力的にも、技術的にも、部活動を指導できる教員が少なくなっております。

このように、急激に進んだ児童数の減少により、集団スポーツができない学校が増えるとともに、やりたいスポーツや専門的な指導を求めてスポーツ少年団に加入するなど、児童や保護者のニーズが多様化する中、部活動の継続的な運営が困難になっており、これらの課題を、学校だけで解決することは難しい状況にあります。

これらのことから、教育委員会だけでなく、むつ市としても、市民スポーツ課が、スポーツ少年団認定員養成講習会の補助を行うなど、「どのよ

うな支援ができるか」という視点で検討を重ねてまいりました。

また、昨年12月に行われた校長会と教育委員会との合同会議の場で、むつ市校長会小学校部会から「小学校運動部活動のスポーツ少年団等への移行について」の要望書が提出されております。

これらを踏まえ、教育委員会では、平成31年度末までにスポーツ少年団等への移行を含めた望ましい小学生スポーツ活動の実現に向けて、校長会や、むつ市連合PTA、スポーツ少年団などの関係者による「むつ市小学生スポーツ活動連絡協議会」を創設しました。

そして、校長会小学校部会からの要望書に関する解決の見通しについて検討するとともに、各関係者の様々な立場から、広く現在の課題を広く把握し、望ましいスポーツ環境を整えていくために、「むつ市小学生スポーツ活動の指針」を策定しました。これが、その表紙と目次となります。3月28日の第688回教育委員会にも議案として提出させていただきます。

この中で、持続可能な小学生スポーツ活動の環境づくりを進めていくためには、学校、保護者、スポーツ活動諸団体をはじめ、地域が総ぐるみで取り組んでいく必要があることを共通理解するとともに、その望ましい在り方として、指導者だけでなく運営面も重視し、より多くの方々との関わりの中で、協働的・継続的な指導体制を進めること、そして児童、保護者、指導者等の負担を軽減しながら、地域主体のスポーツ活動へ移行していけるよう記しております。

また、技術指導だけでなく、豊かな人間性を育てる指導、健康・安全に配慮した指導、事故の未然防止、緊急時の適切な対応などについて、十分留意することが重要であると記しております。

また、子供の負担について配慮し、学校生活とのバランスのよいスポーツ活動を推進するためには、保護者や関係者との連携を深めるとともに、地域主体のスポーツ活動へ移行した後も、施設管理、生徒指導等に関する、学校の協力が不可欠であるとしております。

特に、保護者・学校・関係機関等との連携につきましては、今後、学校や保護者だけでなく、活動に携わる方々の声を丁寧に聞きながら、さらに、今月中にスポーツ庁から出される予定であります「部活動のガイドライン」も参考にしつつ、どのような支援が必要なのか。そして、可能なのかを検討し、積極的、そして計画的に望ましい小学校スポーツ活動を進めてまいりたいと考えておりますので、これからも御理解と御協力をよろしくお願いいたします。

学校教育課： 続きまして、石川から、ふるさとむつ市への愛着と誇りを育む教育の推進に向けた「ジオパーク体験活動推進事業」について説明させていただきます。

下北には、16の魅力あふれるジオサイトがございます。そのため、本事業では、そうした豊かな自然や地域に根ざした文化や伝統について学び、地域への愛着と誇りを育む体験活動を推進するため、ジオサイトの見学や学習を希望する学校の教育活動を支援したいと考えております。

具体的には、見学のためのバス代、教材や教具の費用、外部講師に関わる費用への助成が挙げられます。

それでは、各校での主な取組をジオサイト毎に写真で紹介させていただきます。

まずは、大湊・芦崎ジオサイトです。続いて、むつ市下北自然の家の近くにある、ちぢり浜ジオサイト。続いて、大間崎・風間浦ジオサイト。脇野沢・鯛島ジオサイト。川内・野平ジオサイト。東通村の尻屋崎・猿ヶ森砂丘ジオサイト。薬研・恐山ジオサイト。佐井・仏ヶ浦ジオサイト。

この写真は、郷土芸能を地域の方から御指導いただいで発表の様子です。

この写真は、下北の伝統的な食べ物を地域の方から教えていただいで作った時の様子です。

また、修学旅行先で、下北ジオパークについてPRした学校もございます。

学校参観日での発表、2月に開催された下北ジオパークの学習発表会での発表の様子です。

続きまして、今年1月に各校1学年1学級の抽出で行われた子供用アンケートの結果です。「地域の自然・食べ物・伝統文化などを調べた」「講師の話聞いた」「ジオサイトに行った」が多かったようです。

学習後の感想では、「地域のことに興味を持つようになった」「ジオサイトにまた行ってみたいと思った」などが多かったようです。

成果としましては、ジオサイトの魅力に気付く、地域への関心が高まる、地域のために自分にできることはないかを考える、という協働的な学びへの発展等が挙げられます。

今後の方向性として、時間の確保、課題設定、情報収集、整理分析、まとめ表現、という活動を通して、資質や能力を育成していくこと、体験したことを教科学習と関連していくこと、小中学校間の取組を継続していくこと、等が挙げられます。

このようにして、ふるさとむつ市への愛着と誇りを育む教育の実現に向け、学校と共に、取り組んで参りたいと考えております。

以上で、むつ市教育大綱における4つの主な施策についての報告を終わらせていただきます。

宮下市長： 御説明ありがとうございました。

今日の進め方ですけれども、まずは、教育委員の皆さんに、今のことについて御意見をいただいで、これに、大類補佐からの御意見をいただきたいなど。またですね、時間の許す限りということになりますが、会場の皆様にもせっかく来ていただいでおりますので、何人か御意見があればお伺いしたいと考えています。

まず、今の説明を少し補足させていただくんですが、実は、今回、昨年からNIEをやらせていただいで、また、ジオパーク学習もやっていて、今年予算査定での議論になるんですが、今、むつ市の財政がどういう状況かというと、雪で8億使いました。財政調整基金という貯金がほぼ0になります。4年間で7億貯めたものが雪で一気に消えてしまいました。それプラスですね、今、支

払うお金がなくなって、10億銀行から借りています。そういう厳しい財政状況にある中で、教育に関する予算は増えています。増やしています。その中でも、特に、この昨年から始めた、ジオパークあるいはNIEは、かなり力を入れて頑張っていきたいなと私は思っています。

ただ、一方で、予算査定の中でどういう議論が行われたかという、特にNIEについては、私も、子供達をつかまえて、新聞を読んでいるかと聞くと、「あっ」と言っておろおろしていました。小学生中学生ともですが、もしかしてせっかく新聞を配っているのに書道の下敷きになっているのではというような思いが若干あって、予算査定の中ではこういう話になって、やる気のない学校に予算をつける必要はない、そんなお金ないのだから。一生懸命やっている学校に重点的に配付してというのをどんどんやった方がいいのではないかな。ただ、今回、教育委員会の方では、始めたばかりだからこれから定着していくので、ぜひとも全校でやらせていただきたい。全クラスでやらせていただきたいというお話でした。そのお話を受けて、今回、予算を付けておりますので、そういったことを、是非、皆さんも御承知置きたいです。

同様にジオパークも、何といたしますか、ちぢり浜に行って、自然の家とセットでというのは、今までと同じパターンですね。本当に、各学校でしっかり考えてもらっていますか、という言い方をしたんですね。これももちろん教育委員会では、しっかりと反論がありました。ただ、本当にそうかと、よくよく考えてみますと3年間という中学校の期間、高学年もいれると小中一貫でやっているわけですから4年間という期間でジオパークの学習があって、ジオパークという地域の資源を使って、どういう形で子供達の土台を育むかということ、各学校で本当にやっているのか、目標を持ってPDCAでやっているかということ、私は、まだまだ研究の余地があるのではないかと。だからこれも、しっかりやっている小学校、中学校にだけ予算配分すればいいのではないかな、お金がないんですから。そういう話をしたところ、や

はり同様に始めたばかりだからということと、これから進むんですという説明があって、今回、予算の中でも前年度同様に付けさせていただきました。それだけ厳しい状況の中でも、教育に対しては予算を惜しみなく投入しているという意味、やはり、学校現場の皆さんも御理解いただきたいことをあえてこの場で申し上げたいと思います。

そして、やっているという話があったとしても、子供達に対してアクティブラーニングのところ、表現力ということを求めている時代です。学校自体が表現できないで、子供達に表現力をつけさせることが果たしてできるのだろうかということを取ってこの場で少し申し述べさせていただきたいなと思います。

それでは、ここで各委員からお話をお伺いしていきたいと思います。

まず、納谷委員からお願いします。

納谷委員： 私からは、先ほど市長からお話があった新聞に関してのことですが、新聞社の出前講座というのを私も小学校で聞かせていただいたんですけども、その時に、新聞社の方が、家で新聞を取っているかというような質問をした時に、取っていない家庭が結構多かったんですね。やはり親が新聞を読んでいる姿を見て子供が新聞に興味を持つということが、なかなか今、難しい現状にあるのかなと感じました。なので、学校現場の中で、新聞を活用して子供達に教育をしていくというのが、一昔前に比べたら大変なのかもしれませんが、私の子供を見ていると、新聞の見出しをちらっと見ただけで興味を持ったりというのが、今年に入ってから出てきて、新聞を読み始めてから何かちょっと変わってきたのかなと自分自身で感じていて、子供達に聞いても、朝にその日の当番が自分でニュースを見つけて発表するということが毎日毎日積み重なってきて、一年たって、子供達の中でもニュースの話をしたりとか、少しずつ出てきているといった話を聞いているので、継続して、各学校のクラスで新聞を活用してやっていただきたいなと強く感じます。

スポーツ少年団のことですが、毎回、私お話しさせていただいているのですが、少年団に移行するというのは仕方がないことだと思っているのですが、やはり指導者の確保というので問題であって、旧むつ市内の中にスポーツ少年団とかありますけど、その少年団では、市内の中に指導者がいて指導しているという状況にあると思うんですけど、もうちょっと離れたところ、川内、脇野沢とか、大畑とか、離れていると指導者の確保が難しいという現状が今あると思います。

指導者がいなくて、例えば、むつの方から誰かをお願いして、川内、脇野沢に来ていただくといっても時間がかかりますし、そうすると、学校の部活であれば、午後4時、5時くらいから部活が始まって、先生がみてくださっているのですが、そのまま6時、6時半くらいまで部活をやってスクールバスで帰れるんですけども、スポーツ少年団になった場合に、指導者の方は4時には来られないと思うんですね、仕事があるから。そうすると、7時くらいから始まってしまいます。例えば4時から始まって6時くらいですと、7時から9時くらいまでに御飯を食べて宿題をやって就寝するといった生活のリズムを作れるのですが、7時から9時までが練習になってしまうと、宿題の時間が遅くなったり、寝る時間が遅くなったりして、生活のリズムも変わってくると思いますので、指導者の確保もそうですけれど、指導時間の問題というのがすごくあると思います。

あと、指導者に関しては、指導者の育成ですね。技術の育成もありますけれども、年単位で、指導者に対しての救急の講習など、何かあった時に処置できるといった講習も、是非やっていただきたいと思います。

後は、先程いった帰りのスクールバスで、利用している子供達に関しては、7時から9時になってしまった場合、スクールバスはないので、100%保護者が送り迎えする形になるので、それが負担というか、送り迎えができないからスポーツ少年団に入れない、部活動ができないという保護者もあるのではないかなと懸念しています。

宮下市長： ありがとうございます。次は、村中委員お願いいたします。

村中委員： 今、いくつか考えていることがあるんですけど、やっぱり、学力向上に大事だといわれていることは、目的を子供達に教えてやることと、面白いと思わせることが非常に大事なんじゃないかなと。これを学んで何になるのという台詞はよく聞きますね。でもそれは、なぜここでやらなくちゃいけないのかということはある程度教えてあげることによって、ああそうか、これは大事なことなんだな、覚えるべきことなんだなと、子供達が思ってくれなければ、ただつまらない時間を過ごすことになってしまう。ある程度の目的意識を持ってもらって、やはり、面白いと思わせれば放って置いても子供達はやる訳で、いかに今やっていることが面白いことだと思わせること、例えば読書なんかは、読書をして面白いと思えば、親が読め読め言わなくても子供達はどんどん読んでいくので、そういった面白さをいかに教えるかというのが大事になってくるのではないかなと。それは、各論になってしまうのでしょうから、そこをできれば力を入れていって欲しいなという気持ちであります。

それから、もう一つ懸念するのが、平均点を上げるといった場合、どこを上げるのか。つまり非常に進達の早い子供もいれば、普通の子供もいれば、遅い子供もいる訳ですよ。そのどの子も頑張らして上げていけば平均点は上がるでしょうし、普通の子ももちろん上がるでしょうし、進んでいる子供達にもっと課題を与えて伸ばしていく、それでも平均点は上がるんですけど、理想としては全部の層を上げるのがいいんですけどもなかなか現実として難しいのではないかなと。だからこそ工夫が大事なんじゃないかなと。能力別クラスを作ればある程度いいのかもしれないですけど、なかなか現状ではそれは難しい話んじゃないかなと思うん

ですね。それぞれのスピードに応じて、なおかつ、特によくわかっている子供は、先生からの授業ではすることがなくなってしまうようになって、学校に行くこと自体がつまらない、現実には、都会のできる子供達は学校はつまらない、塾が楽しい。勉強は塾でやって、学校は居眠りするところだと、そんな記事を読んで、そういったこともあるのだろうなと思いましたけれども、むつ市ではそこまでというのはないでしょうけれども、個々に応じてそれぞれの層をいかにうまく上げるかというのを工夫していくことが大事なんではないかなと。

後は、医学的なことから申します。先日ある新聞の見出しを見ていたら、朝御飯を食べたからといって成績は上がりませんよ。といった記事を読みまして、これはなんだ、と思いましたけれども、要するにそれだけではだめですよといったことが書いてあって、それはそうなんだろうと。ただ、これを見て朝御飯を食べなくてもいいのかと思ってもらっても困る。現実には朝御飯を食べる子供と、食べない子供の割合で成績がどう違うかというのがすでにデータとして出ています。医療の現場では、朝御飯を食べない習慣のまま大人になって、体調がよくない人達を診て、朝御飯を食べさせるだけで治るとはいいませんけれども、相当改善する例があります。

きちんとした食事をとるだけで、脳に働くストレスが改善される、それをコントロールする、認識させる。そのためのいろんな仕掛け、それを健全化するというのがありますけれども、子供達も朝御飯をしっかり食べないことによる、脳のストレスとか、精神的なもの、記憶すらも脳に栄養がいった方が一番効率がいい。そういったことが良いとわかっている訳ですから、睡眠時間をどう確保するかとか、食生活をどうするか、そういう日々のコントロールというのがすごく大事だと思うんですけども、学校がどこまでそれを家庭に介入できるかというのもあるので、すごく難しいとは思いますが、そういったこともきちんと指導していくことが、実は大きなかさ上げになるの

だろうということを思います。

次に、知識を確実にする方法でも48時間以内に同じことをやると、その知識が記憶として非常に定着しやすいということがあるんですね。同じ授業でもひたすらずっと同じことをさせるよりも、48時間ずつ、一昨日こういったことをやったよね、とこういうことを繰り返すだけで子供達の記憶の定着がすごく良くなる。そういったことがある訳ですね。

スポーツですが、私、以前にアメリカの学校に行ったとき、3シーズン制があって、うらやましいなと思いました。秋はフットボールの花形選手、冬はバスケの花形選手、春は野球のエースとかいる訳ですね。日本でも全く違うスポーツをやって、これこそ成長にすごくいいのではないかと思っただけですけども、日本はなかなかそれができない。それは、県大会から全国大会とずらっと並んでいて簡単にはできませんけれども、もしスポーツ少年団に移行したら、何も全国大会をめざすだけじゃなくて、冬は室内スポーツあるいはスキーをやる、夏はフィールドスポーツをやるとか、そういう格好で、全国大会を目指すのと別な形での本当の意味での体育、そういうスポーツも目指せないのかなと考えた次第です。

宮下市長： ありがとうございます。

では、宮浦委員長お願いします。

宮浦委員長： 私はジオパークのことを考えました。

ちょうど小中一貫教育とか充実した頃にジオパークが認定されて、私たちの足下を、大地をきちっと見つめ直すきっかけになったことが非常にうれしいことだと思いました。

今、卒業式がピークで、小中高、幼稚園もそうですけれども、子供達を次のステップに送り出すときに、日頃、一生懸命子供達を育ててくださっている先生達を前にして恐縮ですが、本当に、一生懸命育てていただいて、頑張ってもらえよと送り出してやるときに、故郷のすべて、海も

山も、仕事、生業もすべてを含めてということをしみじみと感じながら、子供達に拍手をして送り出しました。

またいつか、疲れた時、故郷で力を発揮したいと思ったときは、いつでも帰ってきていいんだよ、と市長も卒業生に呼びかけていましたけども、私も同感です。その時に、選ばれる土地でありたいなど。そのために、ここで暮らす私達のやらなくてはいけないことがたくさんあるなどということなんですけれども、実際、ジオパークに関しては学校現場にどんっと預けた感じで、かなりの負担、今までにないことがあると思いますけれども、ジオパークに関しては、私達が地域をあげて、漁業、林業など、それぞれの土地に素晴らしい先達がありますし、今頑張っている人達があります。それをいかに活用するか。そして活用したことの良かったこと、問題点をきちんと整理して、なかなか家庭で親が教えることは暮しそのもので大変なことがたくさんあるので、学校に頑張っていたきたいことではあるのですが、そのためにも地域の資源を活用しなければいけない、活用を一緒にしましょうということ。そして、子供達に下北の全部、良さを体中に染みこませて羽ばたかせてやりたい。ここで育ったおかげで、こういう風に大きくなったよとか、これができたんだよとか、そういう風に言ってもらえるような下北でありたいなど、丁度、この卒業式のシーズンにすごく感じました。

それから、学力。今の3学期、一年間の総括の時に子供達が頑張って1点、2点上がり、子供達が不足だったものが良くなったということは、私たちの喜びでもあります。子供達も目を輝かせています。これを継続することは大変なことだなと思いながら3月を迎えました。

宮下市長： ありがとうございます。

次に、田中委員お願いします

田中委員： 私からは2つほど。

一つはキャリア教育の推進というところを触れたいのですが、私は歯科医院を経営しておりますので、キャリア教育ということで5、6年前だったと思うのですが、中学校からぜひ見学に来たいということで、女の子が1人、1日見学に来たりということがありました。その後、ないのですが、今、どういう形でキャリア教育がなされているのかわかりませんが、将来何になりたいかと思ったときに、地域のそういった機関を活用して、私どもはこれから先、歯科衛生士とか、歯科医師もなかなか需要が厳しくなる時代が来ると思っておりますので、是非、興味をもった子供達に紹介して活用していただき、医療とかそういった先端科学は確かに魅力的ではあるのですが、例えば農業、収穫の体験とか、私も両親が育てた非常に美しい採れたてのトマトとかを見たときに、感動したことがありましたので、いろんなキャリアの人が地域にいるはずなので、ぜひ、御一考いただきたいと思います。

もう一つ、スポーツ活動についてですが、豊かな人間性を育てる指導、なかなかこれは難しい。技術とか、怪我をしないようにとか、いろんなことは配慮できても、豊かな人間性とか、なかなか抽象的で難しいと思います。これは経験豊かな先生方がそういう人たちと協働して作る。スポーツというのは基本的に何が一番大事かというルールだと思います。ルールを守らない人は社会性に欠けるということで、そういうところからのスタートだと思います。昔、子供をスキー場に連れて行ったときに、クラブに入っている子供達が、ほぼリフトに乗るのに横から入ってきました。一度、その親御さんに一言クレームをつけたら、競争だから仕方がないよと答えが返ってきました。やっぱり、スポーツをする上で一番大事なのがルールで、先輩後輩といった、きちんとした縦社会、横社会を学ぶことが大事だと思いますので、是非、そのあたりを踏まえた指導体制を作って欲しいと思います。

宮下市長： ありがとうございます。

遠島教育長お願いします。

遠島教育長： わたくしも、時間がないと言うことで一つだけ。ジオパークということでお話をさせていただきます。

市長からも紹介がありましたように、3月31日で教育長を退任いたします。やめていく今、非常に危機感を持っていることが一つあります。それが何かというと、この下北の中での教育の人材不足ということでもあります。

もともと、この地元出身の教員が少ないという現状がありました。そういう時には、他の地区から来ていただくということでやっていた訳ですけども、正式に採用された教員というのは、県下一円に配置されておりますので、下北管内に少ないということはない訳であります。問題は、加配としてつく臨時講師や非常勤講師の下北管内の採用が非常に少ないということでございます。地元にいる方でも、臨時や非常勤をやってくれる方を探せないという状況。ところが、なかなか人材が他からも来てくれなくなっている状況という中で、ここ1、2年でそれが強くなってきています。

地元出身の教員を増やしたいと思っておりますが、そのことが今このテーマでありませぬので、そこは他に譲るとして、地元にあこがれと誇りをもつ人材を育てることで、その人たちに教員を志望してくれるよう願っているところであります。地元の人材を地元の人材が育てるといふ熱い思いを持った教員を育てたい、ということでございます。

教育大綱にあります、地域とともにある学校、ふるさとむつ市への愛着と誇りをはぐくむ学校、その取組として、今、下北ジオパークに取り組んでいる訳でありますけれども、2月に行われました下北ジオパーク学習活動発表会での各小学校での取組であるとか、昨年11月に行われました苦生小学校による下北ジオパークに関する発表や活動とか、まさしくこのジオパークによる教育活動が、郷土への愛着を育むととてもいい教材だと感じているところであります。

ジオパークに取り組むことで、ふるさとむつへの愛着と誇りを育て、将来、教員として地元の

人材を育成する人材に育って欲しいなという風に思っているところであります。

宮下市長： ありがとうございます。それぞれの委員の方から、様々な御意見を伺いましたけども、まず、私の方から簡単にそれぞれのご意見に対する考えを述べさせていただきたいと思っております。

まず、納谷委員に関しては、先ほど、子供達が新聞を読み始めたという言葉がありましたので、是非、そういう言葉があったということでこれからも継続していきたいという風に考えます。

また、スポーツ少年団の件に関しては、納谷委員、村中委員、さらには田中委員からお話がありました。納谷委員からあった、地区の課題、特に旧町村だと思っておりますけども、これは我々自身も課題だと思っております。それは、指導時間の問題というよりも、子供達の時間の使い方だと思っております。このことについても課題の認識がありますし、さらに指導者育成の話、もう一つは移動の話ですね、これらすべて、今回作らせていただいた方針に基づいて、来年度以降、しっかり検討していきたいと思っております。

また、保護者、そして子供にとって最良となるように、これは教育委員会だけではなくて、市長部局、民生部になると思っておりますけども、全庁一丸となって取り組んでいきたいと思っております。

また、村中委員から3シーズン制というお話がありましたけども、これも一つの提案として受け止めさせていただきます。

また、田中委員からは、指導の中で豊かな人間性を育てるといったところで、ルールを守るといった基本的なことが大事だということがありました。これは、今まで学校の先生がやっていたことから地域に行くと、若干それは不安があるかもしれませんが、必ずしも全面的に地域が最初から引き受けるといったことではなくて、移行期間はおそらく学校の先生も指導者の一人として入ってもらうということがあると思っております。とりわけ、旧町村地区というのは、そういうことから始めないとなかなかうまくいかないというのがあると思

いますので、そういうことも含めて、今後、しっかりと検討してまいりたいと思います。

また、ジオパークについては、宮浦委員長と遠島教育長からお話がありました。地域の資源を有効に活用するという事の中で、やはり地域の人達の知恵が大事だということが御意見だったと思いますが、まさに私もそのとおりで思っております。これからガイド員を養成するのも地域の方々が多いですし、それは教育委員会の中だけでやるのではなくて、地域とうまく連携して、子供達のために、このジオパークを、地域を心に残してやる。それで巢立たせてあげたい。そういう思いでありましたが、そこは私も思いを共有しているところでもあります。

教育長からも地域の人材不足ということで、地域からそういう教員を育てるんだというお話がありました。今日は、先生方にも来ていただいていると思いますけれども、魂というか、これを是非、引き継いでいただきたいなと思っています。

それから、キャリア教育の部分で、田中委員の方から御指摘がありました。地域の力を活用してやろうということで、今現在、学校の中では、ユメココ授業ということで、地域の方々のお力をお借りしてキャリア教育を展開しているところがあります。その中では、農業に従事している方にお手伝いしていただいているということもありますので、なお一層、そういった形で地域の力をお借りして、キャリア教育を推進していきたいと思えますし、そうしていただきたいと考えております。

まとめとしては、以上ですけれども、大類室長補佐からコメントがあればお願いいたします。

大類室長補佐：一年間で大変多くの取組、そして成果をあげていらっしゃるというのが、私の率直な感想ですけれども、例えばNIE、新聞を活用した授業の部分ですね、市長はこの部分、大事だし、しっかりやっていきたいとお話がありました。個人的な経験ですけども、高校生の時に一枚の写真を新聞で見ました。5歳の子が傘を何本も持って歩いているんです。どういう写真だろう

とよくよく見たら、傘を貸して、そのお金を使っていつかは学校に入りたいという写真なんです。解説はほとんどそれしかなかったんですけども、高校生の時に見てあまりにも衝撃的だったんです。自分は当然のように小学校、中学校と通ってきたけど、他の国では、教育はあたり前に受けられないということがあるとすごい衝撃を受けて、そういう原体験が、現在自分のこういう仕事に繋がってきたかと思うんですけども、学校では教えられなかった情報とか、世界の動きとか、世界の経済の動き、そういうものを写真だけでも、長い文章を読まなくても、一つの見出しだけでもいいのかもしれない、自分と世界がどう関わっているかというのを知るきっかけとして新聞はすごく大事で、特にこれからの子供達はスマートフォンとかパソコンでは、自分が興味があるニュースしか見ない子供になってしまうということをよく聞きます。そういう子供達にならないように、いろんな世界があるよ、いろんな動きがあるよということを知るために新聞を活用していく取組は素晴らしいなと思いましたので、是非、次年度も頑張って取り組んでいただきたいなと思います。

あと、話は変わりますが、先日、実は少年院の卒業式に行ってきました。女の子の少年院の卒業式ですけども、正直なところ人を殺めてしまったような女の子も中にはいたと聞いていますが、その子達が中学校3年生最後の3月なんですけど、自分の学校では卒業式を迎えられないからということで、少年院の中で、元いた学校の校長先生にも出席してもらって、校長先生から卒業証書をもろうという、あまり知られていないことなんですけどもそういう卒業式で、そこでは少年と呼ばれるんですが、女の子ですけども、しっかりと自分の言葉で、本当に皆さんに御迷惑をかけてしまってごめんなさい、ここで学んだことをしっかりと自分に咀嚼して、これから絶対更正して生きて行きます、これからも見守ってください、見捨てないでくださいと、みんな涙ながらに訴えるんですね。その言葉、表面の言葉ではなくて、本当に心から出ている言葉だったんですけども、その言葉を

引き出せるぐらい、少年院の法務教官というんですけれども、先生方の手厚い指導と、真正面から向き合った指導の成果だなと思ったんですが、本当に子供達って、注いだ分だけ答えてくれるんですね。愛情を注いで最後まで見捨てないで、最後まで君を信じているよというメッセージがあったからこそ、ここまで立ち直ってくれたんだなと感じたんですが、本当に子供達、見えないところでいろんな悩みを抱えていると思うんですね。学力の話にしてももちろんそうかもしれませんが、学校で躓いたり、学校に行きたくない子がいるかもしれない。子供達の関係で生きたくないと思うかもしれない。そういった子供達の悩みも、ちょっと聞こえにくい声も聞き取りながら、子供達と日々向きあっていただいていると思いますが、これからは是非、頑張っていただきたいなと思っております。

また、保護者の方ともですね、是非、向き合っていたきたいなと。大変かもしれませんが、やはり、保護者の方も悩みを抱えていて、それが子供に跳ね返ってきてしまうとよく聞いています。子供の家庭の状況なんかもよく見ていただきながら、むつ市の教育をもり立てていただきたいなと思っております。

今日は本当に、むしろ私の方が勉強になりました、キャリア教育、ジオパークの取組、そして学力向上、こういった総合的な取組でむつ市の教育に取り組んでいるということを知りまして、大変勉強になりました。ありがとうございました。

宮下市長： ありがとうございました。

もう大幅に時間を経過しているんですが、せっかくの機会ですので、会場から御発言ありませんでしょうか、大丈夫でしょうか。

そうしましたら、本日の話を少しまとめというか、私の思いを述べさせていただきますが、学力向上のところ、先ほど、村中委員から御指摘がございました。その中で、目的を教える、面白さを教えることが大事なんだというお話がございました。私はこの点はですね、やはり日々の学習、

アクティブラーニングというのも含めて、先生達の取組もそうですけれども、キャリア教育というのが大事だと思っています。実際に世界や日本で活躍している人達が、いかに基礎的な学力を大事にしているか、そのことがなぜ、将来に繋がっていくのかということ伝えることで、子供達の学習に対する感性がついてくるのではないかなと思っています。平均点、どんどん学力向上しているというか全国学力調査では点数が上がっているといいますけれども、これからどこを上げていくかというと、トップのところをどんどん上げていかなければいけません。まさか高校医学部進学コースというものを作りました。ここに向かってくる小中学生をどんどん作っていただきたい。これは、青森高校にも負けたくないです。しっかりと進学実績を作っていきたいと思っていますので、ぜひ、皆さんお願いします。

繰り返しになりますけれども、下北から甲子園。ずっと言われていました。なかなか実現できません。下北から東大生。これをもう一つの取組、教育の目標にして、みんなで共有して頑張っていきたいなと思っています。

最後に、3点目の御指摘の朝御飯を食べるとか、生活のリズム。やはりこれも、科学的な根拠をもって子供達に教育させるということは非常に大事な論点です。ですから、こういったことも、是非、積極的に研究をしていただいて、そして学習の中に取り入れていただきたいという風に思います。

今日、大類さんに来ていただいておりますが、お話を聞いてふと思ったのは、私が常に感じていることは、地域間の教育の格差です。このむつ市は、なかなか学校の選択肢がないです。東京であれば、多少学力のある子はそれに基づいて、これは東京だけかもしれませんが、そういう学校に行って、自動的にとは言いませんけれどもしっかりとした学校に入るという部分がある。ですが、我々は学校を選ばませんし、それから、塾というか、大手の進学予備校があるわけではない。そうした中では、圧倒的に都会の小学校、中学校よりは、我々の学力に対する役割は大きくなっており

ます。

ただ、一方でその部分をのべつまくなしに評価して、一律にやっていると必ず格差が生まれる。特に今回新しい教育の方針の中で、育成すべき能力の3つの柱ということで、様々な課題が文部科学省から与えられる訳です。ゆとり教育の時もそうだったと思いますけれど、これをやらせると、逆に受験の時にどうなるのかという話が、ちょっと抜けている気がする。その部分をきちんと地域に寄り添った形で、これからの教育行政を、是非、展開していただきたいと思います。

この場で要請をさせていただいて、私からのコメントといたします。

これで最後にいたしますけども、遠島教育長が、8年間むつ市の教育を支えていただきました。

どうぞ皆さん最後に拍手で労っていただけますでしょうか。

遠島教育長どうもありがとうございました。

以上で、議事を閉じさせていただきます。

事務局： 市長、ありがとうございました。

それでは、以上をもちまして、第8回むつ市総合教育会議を閉会いたします。

本日は、お忙しい中御参集を賜り、誠にありがとうございました。